

第一問 次の文章は、桑原武夫くわばらたけお「現代社会における芸術」(一九六九年初出)の一節である。これを読んで、後の問い(問

1～7)に答えよ。

現代社会において、芸術という観念がすでに変化したとは断定できないが、変化のチョウウコウアはかなり顕著にあらわれている。芸術に固有と考えられる若干の属性が、疑問の対象とされていることは否定できない。

芸術は永遠につらなるものとされた。果してそうであろうか。芸術を創作し、これを楽しむのは人間である。今日では全人類が地上から絶滅する可能性がたしかにあるが、もしそうなれば、芸術も当然消滅してしまう。しかし、そのような芸術の全般的消滅という想定も、日本では、あまり強い衝撃をあたえないかも知れない。よきも悪あしきも、あらゆるものは必かならず滅びるという思想が、ここでは根強いからである。全般的消滅の問題ははずすとしても、芸術の価値は永遠不変だという観念はどうであろうか。『ミロのヴィナス』の美しさや『万葉集』の真实性は、いかなる時代にも評価されるという命題は、安全に成り立つであろうか。疑わしい。未来は予測できないにしても、過去の考察から想定をこころみることはできよう。新井白石(注1)は、全裸のギリシャ女神像を見て、おそらく喜ばなかったであろう。ラシーヌ(注2)が『万葉集』の東歌あずまうたを愛唱したかどうかは疑わしい。たしかなことは、『赤(注3)と黒(注4)』が文化・文政期に邦訳されたとしたならば、きつと訳者は手錠をはめられたであろうことである。現にこの傑作は、制作当時、著者の親友で、頭脳明敏をもって知られたメリメ(注5)の評価をすら得ることができなかつたのである。

芸術の時間・空間に制約されない普遍妥当性という観念は、観念的美学者にとっては好都合であろうが、簡単には容認しがたい。もちろん、地球の各地域が孤立していた時代と、科学技術の発達によって地球が日々に小さくなっていく現代

とでは、事情はもちろん同じではない。アフリカ黒人の彫刻が日本で鑑賞され、宋代の文人画がアメリカで讚美さんびされるといふ事態も生じつつある。しかし、外的破壊によるのみでなく、好尚のヘンセンヘンセンによって消滅した（ギリシャ劇）、あるいは消滅しつつある芸術もあるのである。^(注6) 一中、菌八そのはちといった江戸音曲は、いつまで日本青年の心をつかみうるのだろうか。世界中の文化が均一化される方向が生じつつあることは疑いえないが、均一化のさいに主流となるものと傍流となるもののあることは避けられず、置きざりにされて亡びほろるものも生じるはずである。主流として生き残ったものを永遠不変というのであろうか。

社会条件がどのように変かわろうとも、すぐれた芸術の価値の不動であることは親子の情と同じであるなどという議論を今もときどき聞くが、それは自然の永遠不変性をふまえての感情論にすぎない。ところで自然そのものが漸次歴史化されつつある。そして自然のなかへ人為が乱入して、これに改変を強制するのが工業ということではないか。自然は上等、ホンモノ、人造は安物、ニセモノという考え方は、工業発達の初期の感じ方にすぎない。今日、人造ゴムがあらゆる点において天然ゴムにまさることは証明されている。外界自然にしても、人間が管理しなければ、破壊しつくされるところまできている。永遠不変ということばを使うのは、慎重でありたい。

従来の芸術という観念には、つねに個我という観念が強く含まれていた。芸術とは、卓越した個我が、その主観的生命を客体化することと考えられていた。しかし、芸術家の天才的個我に力点をかけるのは、ヨーロッパ近代に独特な考え方はなからうか。人類の長い歴史において、いわばそれは、短い幸福な時期に栄えた一つの芸術観にすぎぬのではなからうか。すぐれた芸術品がここにある。しかし、作者はわからない。だが、美しければ、それでよいではないか、という志賀直哉がなおやの夢殿の観音についてのことばが、ここで想起される。芸術は、社会と自己とのあいだにさげ目を自覚する孤独がなの天才のいとなみであるよりも、天才をも含みつつ、多くの協力者によって成就された共同制作であつた時代のほうが、長いではなからうか。もちろん、ダンテ(注9)や杜甫は、代作者や協力者をもつてはいなかった。しかし、彼の属する社会集

団の共通意識から、とくに自己を切り離そうと思つてはいなかつたであろう。共通的なものを美しく磨こうという^{きもち}気持はもちろんあつただろうが。また、文学をもつて芸術全般の代表ジャンルとは考えてはなるまい。

科学技術の発達に伴つて生まれた新しい芸術のジャンルは、共同制作的性格をその誕生のときからもつていた——映画、ラジオ、テレビ。これらのものを芸術と認めない人もまだあるが、それは少数化した。嫌いな芸術とは言えても非芸術とは言いがたい。

「オリジナル」ということばは、「独創的」と同時に、「もとのもの」(コピーでなくホンモノ)という二つの意味をもつていた。古い芸術の観念においては、芸術品とは、世のなかにたった一つのもの、ユニークなもの、かけ替えがなくて貴いもの、という語感を含んでいた。これも、今日、もはやそのままでは、私たちの現実感覚に適合しないのではなからうか。芸術は、その本性上、独創的であるべきことは当然として、その独創が必ずしも個我の独創性でなければならぬという状況は、^{ていげん}遞減しつつあるように見うけられる。個我の人格がはつきりするものは、それが社会との対抗関係にあるときであるが、社会に対立する個我という観念は、悲壯ではあるが、いまや少し古風な印象をあたえないであろうか。

「オリジナル」のもう一つのほうの意味は、さらに激しくゆすぶられている。オリジナルに対立するものは複製だが、複製という観念なしに、現代芸術は考えられないところまできている。今日、最も成功した芸術家とは、おのれの作品の複製を最大多数に頒布した人というべきであろう。一つの小説の芸術的価値を、その発行部数の多少をもつてはかることはできないにしても、『暗夜行路』は、志賀直哉の原稿か初版本で読まなければならぬという人は、もはや一人もない。映画、レコード、ラジオ、テレビ、写真における芸術作品のオリジナルは、どこにあるか、それをせんさくするのは、^{すず}好事家ですらない。オリジナルをもたない、全部が複製の芸術が生まれたのだ。絵画、彫刻においても、複製技術の進歩は、オリジナルとの区別をほとんど不可能にするところまできている。西洋画において、^{あぶらえのぐ}油絵具の色彩はもとより厚みまで出す技術が生まれた。そのようにして程よく時代のサビをつけられたルノワールを見て、^{注10}芸術的陶醉にふけっている人の

背なかを叩たたいて、それは複製ですよ、という鑑定職人は、むしろ芸術の敵ではなからうか。

芸術における稀少きしう性の喪失は、芸術にたいする神秘的、礼拝的基盤を喪失させつつある。新聞や週刊誌に載る小説は、芸術品でないと断定することはできないが、それを満載した週刊誌が文字どおり読み捨てられ、汽車のなかや街路で、泥靴ウにフまれて見るときの、人は、芸術の永遠性というようなことを口にするのをちゅうちよするのである。「無用になったら、捨てても燃やしてもいいような芸術、次々と取りかえ可能な芸術、非芸術の芸術、そういうものが生まれてきている」(川添登かわぞえのぼる)。

永遠ということばの感覚化であろうが、従来の意識では、芸術品とは、大理石像が象徴するように、なにか固いものという感じを含んでいた。しばらくほ(注1)つておけば、形が変り、くずれるようなものは、芸術ではない。すぐれた文学作品は、一字一句ゆるがすことはできない。つまり、芸術品には持続耐久性があり、それが固いと意識されたのだ。ところが、たとえば一ショット、一ショットが感動をよぶ『真昼(注2)の決闘』が終おわって、場内に灯がつけば、この傑作は私の手のとどくところにもない。そのフィルムは、倉庫にねむっているだけである。すばらしい歌ごえを聞くテレビの合唱とても、同じことであろう。芸術品は私たちにとって柔らかいものとなった。芸術を創作する個我が現代社会の空気に浸透されて、その輪郭がぼやけてきたということもあるだろうが、オリジナルがもはや存在しない、あるいはこれを尊重する人がないという感覚が、芸術品を柔らかく感覚させることになっていないか。

芸術の複製をつくるということは、芸術を規格生産することとつらなる。レコードの長さ、複製写真の大きさの型、そうした規格化が、芸術を制作あるいは享受する人間の心の敏感な部分に、影響を及ぼさぬということは考えられない。それはしだいに芸術の享受者をなんらかの形において規格化して、従順な心的態度を知らずしらすのうちに養成しているにちがいない。

^D 芸術品にたいする感覚が、固いものから柔らかいものへと移りつつあるということは、複製芸術があらわれたという

ことと相即して芸術を考える場合に、問題をいわゆる純粹芸術の考察のみですますことができなくなってきたという状況と密接な関係がある。

- (注)
- 1 新井白石——江戸時代中期の儒学者・政治家（一六五七～一七二五）。
 - 2 ラシーヌ——ジャン・ラシーヌ（一六三九～一六九九）。フランスの劇作家。
 - 3 『赤と黒』——フランスの作家スタンダール（一七八三～一八四二）の長編小説。復古王政により抑圧されたフランス社会や支配階層に対する批判が込められていると言われている。
 - 4 文化・文政期——江戸時代後期。一八〇四～一八三〇年。封建制の衰退が一段と深刻化した時期とされる。
 - 5 メリメ——プロスペル・メリメ（一八〇三～一八七〇）。フランスの作家・歴史家。
 - 6 一中、蘭八——江戸時代中期の浄瑠璃じょうるりの流派。
 - 7 夢殿の観音——法隆寺夢殿の救世観音くぜのこと。
 - 8 ダンテ——ダンテ・アリギエーリ（一二六五～一三二一）。イタリアの詩人。
 - 9 杜甫——中国盛唐の詩人（七一二～七七〇）。
 - 10 ルノワール——ピエール・オーギュスト・ルノワール（一八四一～一九一九）。フランスの画家。
 - 11 ほって——ほおって。
 - 12 『真昼の決闘』——一九五二年に製作されたアメリカの西部劇映画。

問1 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが 1、イが 2、ウが 3

ア チョウコウ

- | | |
|---|------------|
| a | コウソク時間が長い |
| b | 有力コウホにあがる |
| c | ヘイコウ感覚を鍛える |
| d | コウミヨウな手口 |

イ ヘンセン

- | | |
|---|---------------|
| a | 利益をドクセンする |
| b | 開会式で選手センセイを行う |
| c | センザイ能力を引き出す |
| d | 不祥事でサセンされる |

ウ フまれている

- | | |
|---|--------------|
| a | 前例をトウシユウする |
| b | 歌の迫力にアットウされる |
| c | 優秀な人材をトウヨウする |
| d | 薬をトウヨする |

問2 波線部「好事家」の本文中におけることばの意味として最も適当なものを、次のa～eのうちから一つ選べ。解答

番号は **4**

- a 物事の本質を探ろうとする人
- b 都合のよいほうに考える人
- c 人のために行動を起こせる人
- d 物事に特別の趣向を凝らす人
- e 風変わりなものに固執する人

問3 傍線部A「自然そのものが漸次歴史化されつつある」とあるが、これはどのようなことを言おうとしているか。

その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **5**

- a 芸術が普遍妥当性をもつという考え方は自然の永遠不変性を前提とするが、工業の発達に伴い自然そのものに人為が入り込んでいる以上、芸術の価値を永遠不変とする考えも疑問視せざるを得ないということ。
- b あらゆるものはいつか滅びるといふ思想があるため、自然も人間に管理されなければその姿を存続できなくなっている以上、自然を基盤とする芸術も保護の必要性が生じているということ。
- c 芸術は時代の変化に対応しながら常に価値あるものとして評価されてきたが、芸術の基盤となる自然の価値そのものが軽視されるようになってきたため、芸術の価値そのものが疑われているということ。
- d 世界中の文化が均一化され芸術の価値が普遍的ではなくなることに伴い、芸術の基盤となる自然に人為が加えられ、自然に普遍的価値を見出みいだそうという考えにも無理が生じてきているということ。

問4 傍線部B「芸術は、社会と自己とのあいだにさけ目を自覚する孤独の天才のいとなみであるよりも、天才をも含み

つつ、多くの協力者によって成就された共同制作であった時代のほうが、長い」とあるが、これはどういうことか。

その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **6**

a 芸術は、他者とは異なる考えをもつ「個我」が社会的に孤立し協力者を得られない状況で、その人の心情を作品として表現した時代よりも、天才が多くの協力者と共に作業を分担しながら一つの作品を制作していた時代のほうが長いということ。

b 芸術は、他者とは異なる考えをもつ「個我」が自分を排除しようとする社会を主観的に捉え、これを作品として表現した時代よりも、社会における共通のテーマを多くの人々が作品として作り上げていった時代のほうが長いということ。

c 芸術は、社会と切り離された「個我」が自分の存在を認めない社会に対する批判を作品として表現した時代よりも、代表となる者が多くの協力者と共に社会に受け入れられるような作品を制作していた時代のほうが長いということ。

d 芸術は、社会と切り離された「個我」が社会に対抗している状況で、その人独自のものの見方を作品として表現した時代よりも、複数の人々が共通していた認識にもとづいて作品を作り上げていった時代のほうが長いということ。

問5 傍線部C「程よく時代のサビをつけられたルノワールを見て、芸術的陶醉にふけっている人の背なかを叩いて、

それは複製ですよ、という鑑定職人は、むしろ芸術の敵ではなからうか」とあるが、これはどのようなことを言おうとしているか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は 7

a 現代芸術は、テレビやラジオなどのように多くの人が関わる共同制作的性格をもっているため、音楽や登場する人々など様々な要素で構成され、従来のような芸術家個人の独創性を感じさせなくなっているということ。

b 現代芸術は、オリジナルを複製できるようになったため、絵画や彫刻など人間の目で真贋しんがんを見抜けない作品が求められるようになり、高度化した科学技術の使用が避けられなくなったということ。

c 現代芸術は、映画などの全てが複製の芸術が生まれるとともに、絵画や彫刻などオリジナルとの区別がつかないものもあるため、複製芸術の否定は現代芸術そのものの否定にもつながりかねないということ。

d 現代芸術は、週刊誌の小説のように大衆に向けて量産することが想定され、商業主義的なものになっているため、いかに多くの人に受け入れられているかが重要視され、売り上げによって芸術家が評価されるということ。

問6 傍線部D「芸術品にたいする感覚が、固いものから柔らかいものへと移りつつある」とあるが、これはどういうこ

とを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **8**

a 芸術に複製という観念が加わったことによって、芸術が持っていた永遠不変性や独創性という観念がゆさぶられ、人々が芸術とみなす範囲が広がったということ。

b 無用になれば捨てられる作品や次々と取りかえ可能な作品も芸術であると人々が認識し始め、いつまでもその形を変えることがない作品に対しては心的距離を感じるようになっていくということ。

c 複製技術によって芸術を制作する際の規格が設けられ、制作者はあくまでその規格内で柔軟な発想をもって自分の独創性を表現しようとして意識するようになっていくということ。

d 従来、制作者は鑑賞者が作品を目の前にしたときに感じる神秘性を意識していたが、鑑賞者がその場を離れても感動した余韻を残せるような作品を重視するようになっていくということ。

問7 本文の内容に合致するものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **9**

a 芸術の永遠不変性は、オリジナルとほぼ同一の作品を生み出す複製技術によって保証されている。

b 現代芸術の主題は、天才的個我が創り出していった従来の芸術のように明確であることが望まれる。

c 現代芸術における新ジャンルの創出や価値観の変化は、科学技術の発達と密接な関係をもっている。

d 芸術の価値は、持続耐久性が保証されることによって時代や空間の制約を受けることなく評価される。

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、出題の都合上、本文を一部省略・変更した箇所がある。

次の問題に答えてみてほしい。いずれも外国語のオノマトペ（注1）に関する問題である。

- ① 中央アフリカのバヤ語で「ゲンゲレンゲ」は人の身体的特徴を表す。どんな特徴だろうか？
- ② 南アフリカのツワナ語で「ニエデイ」は物体の視覚的な様子を表す。どんな様子だろうか？
- ③ 韓国語で「オジルオジル」はある症状を表す。どんな症状だろうか？

答えは以下のとおり。①「ゲンゲレンゲ」は痩せこけた様子、②「ニエデイ」はきらめく様子、③「オジルオジル」はめまい。日本語ならそれぞれ、①「ゲツソリ」、②「キラキラ」、③「クラクラ」あたりが対応しそうである。

一般に、オノマトペはその言語の母語話者にはしっくりくる。まさに感覚経験を写し取っているように感じられる。ところが、非母語話者には必ずしもわかりやすいとは限らない。実際、日本語のオノマトペは、外国人留学生が日本語を学ぶ際の頭痛のタネになっている。「髪の毛のサラサラとツルツルはどう違うの？全然わからない！」と彼らは言う。

感覚を写し取っているはずなのに、なぜ非母語話者には理解が難しいのか。「感覚を写し取る」というのはそもそもどういうことなのか。この問題は、オノマトペの性質を理解する上でとても重要である。同時にこれは、オノマトペの問題にとどまらず、アートをはじめとしたすべての表現媒体において問われる深い問いなのである。

オノマトペが感覚イメージを写し取ることについて、もう少し深く考えてみよう。対象を写し取るものとしてもっとも直接的で写実的なのは動画や写真だろう。しかし「感覚」は、外界にあるものではなく、表現者に内在するものである。

^A 絵画はどうだろう。写真ほど忠実ではないが、やはり対象を写し取っていると云ってよいだろう。しかし、絵画で大事なのは、表現者の「感覚の表現」であり、多かれ少なかれ絵画の中に見えるものは、表現者の「主観的感覚」である。

したがって絵画は、その抽象度において大きな差が生まれる。非常に細密に対象を切り取った具象的な絵画は、その対象が誰にでもよくわかる（もちろん、それだけではアートにはならず、どんなに具体的に描かれた対象でも、そこに表現者の「感覚」が表現されてはじめて「アート」であると言える）。他方、抽象絵画は表現者の内的な感覚の表現に重点が置かれ、特定の対象が同定できないこともよくある。

オノマトペは絵画のように「感覚イメージを写し取る」のであろうか？ オノマトペは、少なくとも当該言語の母語話者はそれぞれ意味を直感的に共有できるので、絵画でいうと、具体的な対象が同定できない抽象絵画よりは、具象絵画に近いだろう。ただし、絵画は原則、鑑賞者の使う言語や文化に関係なく受けとめられることを前提としているが、オノマトペは特定の言語の枠組みの中で理解される。

アイコンはどうだろうか？ そう、コンピュータ画面でアプリやゴミ箱を示したり、街中でトイレや交番などの場所を示したり、メールやSNSなどのデジタルコミュニケーションで感情を伝えたりするための、アレである。

アイコンは、アート性よりは、わかりやすさを重視した記号と言ってよいだろう。ちなみに「アイコン」の語源はギリシア語の「エイコーン eikon」（ラテン語では「アイコン icon」）で、〈偶像、崇拜の対象となる像、象徴〉というような意味を持つ。「感覚イメージを写し取る」という観点からアイコンが興味深いのは、かなり抽象化しているのに、対象がわかりやすい点である。「☺」「(´_´)」のような絵文字・顔文字 (emoticon) も、かなりデフォルメされているにもかかわらず、笑顔であることが一目^アリョウゼンである。



実は、オノマトペが注目されている大きな理由は、まさにこの「アイコン性 iconicity」にある。アメリカの哲学者チャールズ・サンダース・パーズは、「アイコン」ということばを「性質から対象を指示する記号」という特別な意味で用いた。噛み砕くと、「表すものと表されるもの間に類似性のある記号」のことである。絵や絵文字は、それらを構成する点や線の組み合わせが対象物に似ているので、パーズの意味でも「アイコン」である。ジェスチャーの多くもアイコン

である。ステーキを食べるジェスチャーは、実際にナイフとフォークを持っていないとも、ステーキを食べる動作に似ている。

この定義によれば、オノマトペはまさに「アイコン」である。表すもの（音形）と表されるもの（感覚イメージ）に類似性があると感じられる。日本語の母語話者であれば、「ニャー」というオノマトペはネコの声に似ていると感じる。音以外を表すオノマトペであっても、たとえば「ピカピカ」という音連続と明るい点滅は似ている気がするし、「ぶらり」という音形も気軽なお出かけにかにも似合っているように感じられる。しかし、よくよく考えてみると、この「似ている」という感覚は、それ自体どこか曖昧で興味深い存在である。

^B メールやSNSで使うアイコンや街中で見るアイコンと、少なくともパースの定義では「アイコン」とされるオノマトペがどのように違うのかもちょっと考えてみたい。アイコンは視覚的な対象を、視覚の媒体で表すのが普通である。

「😊」という絵文字は笑顔という視覚情報を表す。私たちは、アイコンがもとの対象と「似ている」という感覚を持ち、その感覚からアイコンの指し示す対象が何かを認識できる。とくに漫画的な表現では、音や手触り、心情といった目に見えない要素までも比喩的に視覚化することが可能である。たとえば、「M(□・□・:)」という顔文字では、心的なショットが「M」のギザギザで表されている。いずれの例においても、アイコンは視覚的な記号である。

他方、オノマトペが用いるのは視覚ではない。音声という聴覚的要素である。音と対象が「似ている」と感じることで、音から対象を認識し、イメージすることができると。しかし、視覚的なアイコンと違い、音では、対象となる事物の全体像は写しにくい。たとえば、アイコンでイヌやネコを表すときには、「」「」のようにその全身の形を写し取ることが可能である。一方、「ワンワン」や「ニャー」といったオノマトペは、イヌやネコの鳴き声を写し取ることができないもの、これらの動物の全体の形を写し取ることができない。「ギクッ」というオノマトペも、強い驚きを写してはいないもの、「M(□・□・:)」という顔文字が表すような表情や汗といった要素までは写しきれない。

つまり、視覚的アイコンは、一度に複数の要素を写し取ることができる。輪郭も写し取れる。そのため、物事の全体を、場合によってはその詳細まで写し取ることが可能となる。それに対し、音声で写すことができるのは、基本的に物事の一部分である。残りの部分については、「ワンワン」ならイヌ、「ニャー」ならネコ、「ギクツ」なら人に知られたくないことを知られた場面、というように連想で補うことになる。

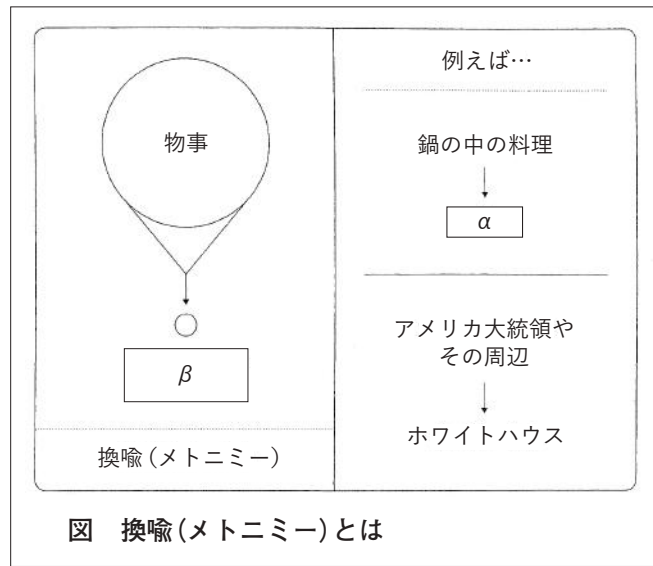



図 換喩(メトニミー)とは

このような連想は、「換喩(メトニミー)」と呼ばれる。国語の時間に詩の表現技法として習う概念である。換喩は、ある概念を、それと近い関係にある別の概念で捉える。「鍋が食べたい」といえば、料理を作るための器である鍋でもって、その中身の料理を指す(図)。「ワンワン」や「ニャー」も、イヌやネコを特徴づける鳴き声をヒントに、その鳴き声の主の情報を読み込む。「ギクツ」はやや抽象的であるが、驚いた拍子に体がわずかに動く様子(あるいは関節が鳴る音)を音で模すことで、その動きの原因となった気まずい驚きを換喩的に表している。換喩的思考ができるからこそ、人間の言語はオノマトペを発達させられると言ってもいいだろう。

さて、オノマトペが物事の一部分しか写せないのには、オノマトペの根本的性質が関わっているものと思われる。「オノマトペは言語である」という性質である。言語は、単語を組み合わせることでさまざまな物事を表す文・発話で複雑な形式が必要となる。同じことをオノマトペで行うとしたらどうだろう？

我々の声というのは、原則、一度に一つの音しか発することができない。したがって、複雑な形式を作る場合は「ニャー」や「ギクツ」のような音数では足りず、長つたらしい発話が必要となってしまうであろう。複雑で長いことばは覚えにくいだけでなく、コミュニケーションにシショウをきたす恐れがある。言語の構成要素として効率のよい発話をするためには、オノマトペは簡潔である必要があるのである。簡潔であれば、写し取ることができる対象は限られる。オノマトペが物事の一部分しか真似ることができないのはそのためであろう。

^c同じことが手話についても言える。手話は絵文字などと同様、視覚的な媒体である。また、程度差はあるものの、パースの言う意味で「アイコン的」とされる。たとえば、日本手話で「雨」は、幽霊のようにした両手を、顔の前から胸のあたりまで2回下ろすことで表す。この手話は、雨の筋が多数であることと、その移動方向が上から下であることを写し取っている。

しかし、雨降りのシーンのすべてを写し取っているわけではない。空や地面、あるいは雨を防ぐための傘といった関連要素は換喩的な連想で補わなければならない。これは、現実的な単語の長さにくわえ、手や指の数、見分けられる手・指の向きや動きのパターン、表情などに限りがあるためである。このことは、「」が単一のアイコンで雨粒と傘の両方を写し取っていることと対照的である。手話は、音声言語と同様に自然言語である。^(注2)ジェスチャーでも人工言語でもない。そのことが物事の写し取り方にも表れているのである。

(今井むつみ、秋田喜美『言語の本質』による)

(注) 1 オノマトペ——擬声語及び擬態語。オランダの言語学者マーク・デインゲマンセによる「感覚イメージを写し取る、特徴的な形式を持ち、新たに作り出せる語」という定義が広く受け入れられている。本文では、この定義をふまえて、オノマトペについて議論がすすめられている。

2 自然言語——人間が意思の疎通などのために日常的に用いる言語。日本語、英語など。社会において自然に発生して用いられている言語。後述の「人工言語」は、コンピュータのプログラム言語などのように特定の目的や機能を果たすために人間が作り上げた言語。

問1 傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群のa～dのうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

アが10、イが11、ウが12

ア リヨウゼン

- a 主題がメイリヨウなレポート
- b 学習と部活動のリヨウリツ
- c 機械をカイリヨウする
- d 社長のサイリヨウに委ねる

イ コウチク

- a ハチクの勢い
- b 害虫をクチクする
- c ガンチクのある考え
- d カイチク工事を行う

ウ シンショウ

- a イッシを報いる
- b 会計のシユウシ報告
- c 街でオンシに出会う
- d 脳にシゲキを与える

問2 傍線部A「絵画はどうだろう。」とあるが、筆者は絵画を例に取りあげて、どのようなことを述べているのか。その

説明として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は **13**

a 「感覚イメージを写し取る」ことについて、絵画は表現者に内在する感覚を写し取るアートであり、鑑賞者の言語や文化を問わないと述べている。これに対して、オノマトペは直感的に意味を共有できる対象を写し取るものであるが、文化的枠組みの共有を問わない点は同様であると述べている。

b 「感覚イメージを写し取る」ことについて、絵画は表現者の主観的感覚を重視するため、鑑賞者の使う言語や文化的価値観を前提とすると述べている。これに対して、オノマトペは具象絵画に近く意味を直感的に共有できるため、言語や文化が異なっている者同士でも内容を理解できると述べている。

c 「感覚イメージを写し取る」ことについて、絵画は細密に対象を切り取った具象的なものと表現者の主観的感覚を描いた抽象的なものでは理解に差が生じると述べている。これに対して、オノマトペは音を模した具体的表現であるため、話者が容易に対象を見極めることができる普遍的表現であると述べている。

d 「感覚イメージを写し取る」ことについて、絵画は主観的感覚の表現を重視するため必ずしも理解が容易ではないが、鑑賞者の言語や文化を問わないと述べている。これに対して、オノマトペは意味を直感的に共有できる具体性があるが、言語や文化の枠組みが前提となる場合があると述べている。

問3 傍線部B「メールやSNSで使うアイコンや街中で見るアイコンと、少なくともパースの定義では『アイコン』と

されるオノマトペがどのように違うのか」とあるが、その違いについての説明として最も適当なものを、**a**～**d**のうちから一つ選べ。解答番号は **14**

- a** アイコンは目に見えるものをそのままの形で表すため全体の形を写し取ることができるが、目に見えない要素は描けない。一方、オノマトペは手触りや心情をも描き出せるが、写し取るのは物事の一部分にとどまる。
- b** アイコンは指し示す対象を視覚的に表すため、対象を写し取りやすく特徴を伝達しやすい。一方、オノマトペは音声によって表されているため、何を対象としているのかがわかりにくく意味がとらえにくい。
- c** アイコンは対象を視覚的な媒体によって写し取るため、複数の要素を描くことも可能となる。一方、オノマトペは聴覚的な媒体を用いるため写し取られているのは物事の一部であり、認識する側は連想で補う必要がある。
- d** アイコンは視覚的な媒体で対象を具体的に表現するため、どのようなものでも描くことができる。一方、オノマトペは対象を音声によって表しているため、対象が音に関するものに限定され高度な連想が要求される。

問 4 図の空欄 α と β を補う内容の組み合わせとして最も適当なものを、次の a ～ e のうちから一つ選べ。解答番号は

15

- | | | |
|---|-----------------|------------------------|
| a | α : 鍋 | β : 代表するものに置き換える |
| b | α : 鍋 | β : 客観的なものに置き換える |
| c | α : すき焼き | β : 抽象的なものに置き換える |
| d | α : すき焼き | β : 代表するものに置き換える |
| e | α : すき焼き | β : 客観的なものに置き換える |

問5 傍線部C「同じことが手話についても言える。」とあるが、ここで筆者はどのようなことを言おうとしているのか。

その説明としても最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は16

a 手話は、絵文字などと同様に程度の差はあるものの「アイコン的」とされる視覚的な媒体であるため、表現形式は簡素であるが相手に伝わりやすい。オノマトペは、聴覚に基づいて意思疎通を行うため、効率のよい発話を心がけ単純化しすぎるとコミュニケーションに誤解が生じてしまう。

b 手話は、視覚による伝達であるが、現実的な単語の長さにくわえ、手や指の数、見分けられる手・指の向きや動きのパターンなど、伝達方法に限りがある。オノマトペも、物事の一部分しか写し取れないため、意思疎通に限界があり、正確に内容を伝えようとするとかなり長い発話が必要となる。

c 手話は、手や指によって表現を駆使することでさまざまな物事を表すが、写し取れることは限られており、連想で補いながらコミュニケーションを図る必要がある。オノマトペも、効率のよい発話のために簡潔を基調としているため、換喩的思考を必要とする自然言語としての本質を備えている。

d 手話は、対象のすべてを写し取っているものではなく、関連要素を換喩的な連想で補って解釈しなければならぬという自然言語の性質を備えている。オノマトペは、連想で補わなければならない点は手話と同様だが、物事の一部分しか写し取ることができないため、人工言語に属する。

問6 次を示すのは、本文を読んだ後に生徒が話し合いをしている様子である。これを読んで、後の(1)～(3)に答えよ。

生徒A——オランダの言語学者マーク・ディングemanセは、オノマトペを「感覚イメージを写し取る、特徴的な形式を持ち、新たに作り出せる語」と定義したんだよね。

生徒B——筆者は、オノマトペの「感覚イメージを写し取る」という点に焦点を当て、「アイコン」を切り口として議論をわかりやすく展開させているね。

生徒C——アメリカの哲学者チャールズ・サンダース・パーズは、「アイコン」ということばを「性質から対象を指示する記号」という特別な意味で用いたとあったね。絵や絵文字は、それらを構成する点や線の組み合わせが対象物に似ているので、パーズの意味で「アイコン」と言えるんだ。

生徒A——筆者は、こうしたことをふまえつつ、オノマトペは **X** と言っているんだ。「ニャー」「ピカピカ」「ぶらり」にしてもなるほどそのように言えるよね。

生徒B——オノマトペのアイコン性は、それを構成する音にも認められていて、これを「音象徴」というらしいよ。

生徒D——「音象徴」には、万国共通のものもあれば、文化的な事情が関与し、言語によって異なるものもある。言語によって、「音」の特徴があるんだよね。本文最初の外国語のオノマトペや外国人留学生の話題は面白かったよね。これには、たとえば **Y** といったような事情が関連しているみたいだよ。

生徒C——ところで、筆者は、オノマトペを言語とみなしているようだね。Dさんが述べたような事情も言語としての本質を備えていると言えそうだな。

生徒B——また、本文ではオノマトペに **Z** という性質があることを指摘している。こうした性質をふまえて、オノマトペを言語とみなしているんだよね。

(1) 空欄 **X** に入る発言として最も適当なものを、次の a ～ d のうちから一つ選べ。解答番号は **17**

- a 音形で表しているものと、その表されるものから受け取る感覚イメージに類似性があると感じられる
- b ジェスチャーと同じ手法でそれ自体どこか曖昧でありながらも、なんとなく受け取り手に伝わる
- c 音形を反復させることで、受け取り手がその意味を感覚的に理解できるという特徴的な形式を持っている
- d 伝えようとしている音形と、受け取り手によって聞き取られている音形が確実に一致している

(2) 空欄 **Y** に入る発言として **適当でないもの** を、次の a ～ d のうちから一つ選べ。解答番号は **18**

- a 音声学的にみるとハ ha とバ ba の関係とバ ba とパ pa の関係は異なっているが、日本語話者は、ハ ha 行とバ ba 行とパ pa 行をそれぞれ対比関係にあると認識しており、例えば「ハ ha ラハラ」、「バ ba ラバラ」、「パ pa ラパラ」の三つを違うニュアンスで使い分けているが、これは歴史的变化の産物である

- b 母音の a、i、u、e、o に対して、子音には p、t、k、b、d、g、z など空気の流れが突発的ないし不規則に変動する「阻害音」と、m、n、y、w など空気の流れがなめらかな「共鳴音」があり、聞き手はこうした気圧の変動を耳や口で感じ取り、視覚的および触覚的イメージに結びつけている

- c 日本語のタ行は「た ta て te と to」と「ち chi」と「つ tsu」が異なる子音でありながら、日本語話者には「カタカタ」「カチカチ」「コツコツ」は単にカ行とタ行との組み合わせとして意識され硬いモノ同士の衝突音を写すが、英語では例えば t と ch が異なる音象徴を持っているため異なる印象をもつ

- d 韓国では「陰陽」という伝統的な東洋思想が根付いており、発音の際に口を大きく開ける a の「陽母音」は〈明るい、小さい、軽い〉といった概念と結びつくのに対し、口をあまり開けない i の「陰母音」は〈暗い、大きい、重い〉といった概念と結びつく

(3)

空欄

Z

に入る発言として最も適当なものを、次のa～dのうちから一つ選べ。解答番号は

19

- a 物事の一部分を写し取った音形で情報伝達を行うが、残りの部分を換喩的な連想で補う
- b 物事を抽象化することが可能だという点で、絵や絵文字などとは根本的に異なる
- c 言語の構成要素として効率が良く、円滑にコミュニケーションを図ることができる
- d 音形と意味との関係に普遍性がみとめられ、新たな表現を簡単に作り出すことができる